

〔翻 刻〕

筑波大学附属図書館所蔵 西村本『間之本』（B冊 その二）

飯 塚 恵理人

B冊の二回目として、「藤栄」「三井寺」「安宅」「芦刈」「感陽宮」「唐船」「鳥追舟」「俊寛」「横山」「小原御幸」「閑
原与市」「六代」「木賊」「木曾願書」「隱岐院」「羊」「俊成忠則」「弱法師」「護父王」「行家」「長兵衛」「村山」「二人
閑」「土車」「班女（前半）」「邯鄲（後半）」「現在熊坂」「富士山」「葛城天狗」「玄上」「春日龍神猿」「鶏龍田」「盛久」
「望月」「今春道成寺」「七騎落」「丹後物狂」「同丹後物狂」の三八曲分を翻刻する。以後は次号とする。

△藤栄 廿一

太夫ノ供ニテ、太刀持也。

へ御前に候。へ畏て候。へふしき成事を仰らるゝ、あれハ鼓・太鼓のおとにてハなき物を。へあれへ参聞て御座れ
ハ、鼓・太鼓のおとにてハなく、波のおとかと存候。へ畏て候。へあらふしきや、能々きけハ、鼓・太鼓・笛のおと
にて候。へ何と申ぞ、なるを殿の酒迎に御出と申か、やれくめでたい、そのよしを申さう。へいかに申候、仰のこ
とく拍子のおとにて候が、なるを殿の酒迎に御出と申候。へ尤是に御待あらうするにて候。能力へ畏て候。舞まふ。へ
此扇を藤栄殿にさし申さう。ふし舞子へ又君の大傘をびやうたうげきしうにかたげて、我等もお供申さん。へ何事にて

候ぞ。へあれハ藤栄殿と申て、殊外御いせいの人よ。へ何と、只今の舞見事に舞ふた程に、又まへみよう。へそれハたがいふぞ、いや言語道断の事じや、急て此よし申さう。へいかに申上候、あれに修行者が見物致て申やうハ、今の舞をやうまふた程に、又まへみようと申程に、たがいふそと申て候へハ、ねそくと愚僧がと申ス、慮外者で御座る程に打擲いたさう。へいや無用で御座ある物を。へやいお主ハ果報な人しや、唯今ハ舞をまハせられた程に、今度ハかつこをうつてきかせられうと仰らる、ぞ。へにくいやつじや、おれがま、ならハ、これくをいたゞかせう物を、腹立や、あ、腹たちや。

三井寺 廿二

太夫出テ、南無や大慈大悲の観世音をうたふ、うちにあらありかた「し」や候、ヒヒヒやかて下向、狂言出ル、申さハやと存ル。

へかやうに候者ハ、門前に住居する者にて候、さんらうの女性上らうにお宿を参らせて候、御むかひに参らハやと存る。へいやハや御下向にて候、先是にお腰をかけられ候へ。へ某ハ門前におゐて夢をあハする者にて候が、御さんらうのうちに御れいむを御覽せられ候ハ、御物語候へ、あハせて参らせうするにて候。へ近比目出度御霊夢にて候、尋る人にあふみの国、御子を三井寺と合せ申て候、いそひて三井寺へ御参候へ。へ是合いまみちとうげへ御あがり候へて、少右へ御出候へハ頓て三井寺にて候。急て御参候へ。後能力脇ノ供に出ル、ワキ座へついて間出、シテ柱の先にて少しやべる。へ扱々見事な月哉、いつもと申ながら、今宵のやうなくまなき月ハ御座有まい。へいかに申候、毎年名月とあつてなめさせられ候が、今夜のやう成見事成月ハ御座有まいと存るが、何とおほしめされ候ぞ。へ尤少人を御伴ひにて候間、いかにもおもしろう狂ふて御目につけ申さうする。ゐなから一天四海波を舞納て、すちかい柱かやくやの方をみてへやれくそなたのとゞめくは何事しやといふぞ、なにと女物狂ひしやといふか、おもしろうくるふか、いや、是ハこなたへ呼入てあのおさなひに御目につけう、さんミをよひたつる。へ門前に女物狂ひがおもしろう狂ふと申が、是を呼入テおもしろうくるハ

せて御目かけ申さうと存るが、何と御座あらうするそ。へいや苦しう御座有まいが。へのふ三位殿く。へや、某の存たとハちかうた、三位殿のあのやうにおしやるならハ成まい、何とおもしろう狂ふか。へじやあ。しやう面むき笑。へやれく三位殿ハだうおしやらうとま、よ、某の心意を以て呼いれう、シテ柱の先から楽屋へむいて。へやいくその物狂ひをこなたへ呼入たらハ、御ふきやうであらうする程に、いかにも道をひろくとあけこなたへとをし候へ、く。シテ、舟人もこかれ出らんといふ時、そのま、立テ へ宵の大御酒に給酔てごやをわすれうと致た、いそひて鐘をつかう、鐘にむき、寔に此鐘程音ノよい へ寔に此鐘を程音のよい鐘ハ御座有まい、せいとうだい寺、なり平等院、こゑおんじやうじと申て、日本に三つのかねにて候、此音程よい音も御座あるまい。へしやも、くつくなり。へいやはちがさいた。へ是ハ人のつかぬ鐘にて候よ へお、某かつくこそ道理なれ、此寺の鐘つくくほうしにて候よ。諷に、かけハさなからしも夜にてく月にやかなハさへぬらん。へいかに申候、女の物狂ひの鐘をつかうと申候。

△安宅 廿三 ワキノ供シテ。【以下かすれのため判読不可】

へ御前に候。へ畏て候。へ皆々承候へ、此度判官殿ハ拾貳人の作り山伏となり、おくへ下らせらるゝを、頼朝きこしめしおよハせ給ひ、国々に新聞をすへ、山伏をかたくあらめとの御事により、此国をとかし殿承りにて候間、山伏の通候はこなたへ申候へ、そのふん意得候へく。△太鼓の座ニおいをおろして、はしか、りへきて、や、何と言そ。へおれが衣ハすゞかけの、やふれて事やかきぬらん。△へ御前に候。へ畏て候。シカく。へそれハ冥加に叶ひたる事にて候。シカく。へ畏て候。へ是ハ一大寺の事を仰付られて候、迷惑なからみて参らいて叶ぬ事しや、みて参らう、先此ときんをぬいで参らう。へ扱もく夥敷事哉、やぐらかいたてをあげ、殊外姻敷躰にて候間、あの躰にてハとをらせらるゝ事ハおもひもよらぬ事じや、いそひて帰り、此由申さハやと存る。へあらふしきや、あの木の下に何哉覧くろい物が五六つみゆるが、なんじや知ぬ。へやあくあの木の下にくろい物が数多みゆるが、あれハなにじややい。へなにと、山伏の

こ、じゃ。へそれハ寔か、あ、こわもの、急てかへらふ、去なからいたハしき事にてある程に、一首つらねてもどらう。へあ、なにとかな。へ山伏ハ、かいふいてこそにけにけれ、たれおひかけてあびらうんけんく。へあ、只長ゐハ大事しや、いそひてもとつて此よし申さう。へいかに申候、関の様躰み申て候が、中く姻敷躰にて矢倉かいだてをあけ夥敷様躰にて候、又木の下にくろき物が五六つ程みえて候程に、不審に存知尋候へハ、山伏のこ、しやと申程に、いたハしく存知て一首つらねて御座ある。へ山ふしハ、かいふいてこそにけにけれ、たれおひかけてあひらうんけん^はとみえて候。へ中く^はの事。諷、よろくとぞあゆみ給ふ、御あり様そいたハしき。太刀持へいかに申候、山伏が殊外大勢通候。

へやう【のかわ】な仰られそ、きのふも三人切てかけて候。へいかに申候、判官殿の通らせられ候。太刀ヲ渡スへあ、れうしめされなく、かうくおとをりやれく。へ御前に候。シかくへ畏て候。へいかに案内申候。シかくへたれにてわたり候ぞ。へ関守最前ハれうじ申て候間、是迄酒を持せて参られ候、そのよし御申候へ。能力へそのよし申さうするにて候。へいかに申候。へ関守最前ハれうじを申て候間、酒を持せ、是迄参られて候。へ畏て候。へのふく^く氣遣や、へこなたへ御通あれとの御事にて候。へ右ノ通いふ。

初かうりきおいおろして、何といふぞ、それハ誠か、一大事之事いそいで申候はん。いかにむさし殿ニ申候、只今たひ人の申ス事ハ、安宅のミなどにハ新聞をすへ山ふしをかたくあらむよし申候といふ、七大夫ニハなし、今春に有り。

△芦刈 廿四

へ此所の者とお尋ハ、如何様成御用にて候そ。へその事にて候、もとハ此所に御座候へ共、散々御ふりよく被成、今ハ此所にハ御座なく候。へ何事【にて】候ぞ。へさん候、此難波の浦ハ名所にて候に、色々面白事数多候、中にも、此市に出、芦を売おのこの候が、常の商人にハかハリ歌・連哥の事をも能存シ、色々のたハふれ事を申シ、おもしろうり候程に、是を呼出し御目にかけ申さうするか、何と御座あらうするぞ。へ左有ハ呼出し御目にかけ申さう

する間、かう御通候へ。へやあくあしを売おのこに、こなたへとうくきたれと申候へく。へか、る目出度事こそ候ハねハ、都へ御供あらうする間、ゑほしひた、れをめされ候へ。へ言語道断の事にて候、さきに御尋ありたるハ只今の御方の事とみえて候。へいかに申候、最前御尋被成たるハ只今の御方の事にて候か。へそれハ目出度事哉、か様に早く尋あハせらる、事ハ、一入めてたう御座候、扱は是都へ御供あらうすると仰わたされたるか。へそれハなんほう目出度御事にて候、先能きこしめされ候へ、最前申ことく常の商人にてハ有ましい、歌・連哥の事をも能御存知にて、色々のたハふれ事をのたまひうり給ふ程に、いか様不審成との申事にてありつるが、扱ハゆへ有御方なれハ、余人にかはりたるハ尤にて候、扱かやうにハやく尋あハせらる、事も、始ふ我等を呼出し、御尋候に合たれ人共知す芦をうるおのこがおもしろう売と申て呼出しみせ申たるに合、はやく御逢被成候、我等ハちうの者にて候間、御上洛あらハ御供申参りたいと存るが、何と御座あらうするぞ。へそれハ近比かたしけない事で御座有、我等も御供申都へ上るハ一入果報にて候間、左有ハめしつれられて下され候へ、我等も日比の嗜にハ、名所にありなから所の古歌をも知ねハ口がきかれぬと存して、一首ならふてをき申たるが、御供申参たり共難波の浦にすみたる印にならふるかと存候。へ何と我等の習ひたる歌がきかせられたいと仰候か。へさあらハ込の事に読て聞せ申さうする。

△物の名も所によりてかはりけり、難波のあぢハ伊勢の蛤とならひ申たるが、何とおもしろい歌にてハ御座なく候か。へ扱ハさやうにて御座候へハ、我等の習ひたるハすちなき事にて候か、慥におしへたる者が御座有が、扱ハ某をなぶつておしへたると存候、都の御方の仰候が本説にて御座あらうする間、よき学文を致て候、それハともあれ必御供申さうするにて候。へ畏て候、頓てそのよし申さうする。へ扱も目出度事哉、我等も御供申のぼらうするハ嬉しい事にて候、先左衛門殿に御出あれと申さう。へいかに左衛門殿へ申候、ゑほしひた、れをめされたらハ、とうく御出あれとの御事にて候、心得申て候、一段の御機嫌にて候。

感陽宮 廿五

つくり物出テ、口あけ、大夫らんしやうにて出ル、ケイカシンブヤウ出テハシカ、リヨリ安内、凡太鼓ノ座ヨリ出テ、

へかやうに候者ハ、しんのしくはうに仕へ申ス官人にて候、此君けんわうにてましましてハ、吹風枝をならさず、民戸さしをせず、誠に目出度御代にて候、然所に、此国を隣国合うか、ひ申候間、此よしきこしめし、ゑんの指図、ならひにはんゑきがかうべを持て参内申物ならハ、くんかうハ申に及ず、何にても望ミを御かなへあるべきとの高札を御うたせ被成候へ共、今日に至る迄如何様成者も奏聞申さす候、奏聞申者あらハ、こなたへ申候く。しかくへ奏聞申さんとハ如何様成事ぞ。しかくへ左有ハそれに暫御待候へ、そのよし申さうするにて候。△狂言太鼓ノ座ツレニ言フ。△いかに奏聞申候、只今そうもん申へきと申者御座候間、如何様成者そと尋て候へハ、ゑんの国のかたはらにすむけいか・しんふやうと申二人の者にて候が、高札のおもてに付て、ゑんの国の指図、ならびにはんゑきがかうべを持て参内申たるよし申候。へ畏て候。へいかに最前の人のわたり候か。へそのよし奏聞申て候へハ、いそひて御参内あれとの御事にて候、去ながら御大法にて候間、太刀・かたなは某預り申さうするにて候、こなたへ給り候へ、△太刀・刀預ル也。△へさん候、是合三里あがつて、又十八町下テ、又あかつて御殿の候に君の御座有ぞ、いそいで御参候へ。

△唐船 廿六

唐の子共二人、一セイにて出、舟をハシ掛リ、シテ柱のまなか間をき、ワキ正面の方へ付テ、唐の子共二人のり、間後にのる。

日本、ツキノ供して出ル、太刀持。
へ御前に候。

へ畏て候。衆屋の方を向いて。へいかにそけい官人へ申候、いつものことく今日も牛馬をかハれ候へ

との御事なり、急てのかいに知られ候へや。唐へ御前に候。へ畏て候。爰にて唐人のまね、日本、わけがきこへぬ程に和しておしやれといふ。唐へ心得申て候、是成ハ諸越にやうぢうの津に、そけい官人と申人の子、そんし・そゆうと申二人の者にて候が、そけい官人ハ先年日本へとられ、箱崎殿に御座有、存生のよし承り、数の宝にかへ帰国ありたきとて、此所へわわた

り申されて候、官人ハ存生に御座有か承度候。日本へ中へ存生にて箱崎殿に御入候。唐へさあらハ何共して箱崎殿へひきあはせて給り候へ。日本へそれハ奇特成事にて候、そのよし申あけ候べし、それに御待候へ。唐へ心得申て候。日本へいかに申上候、そけい官人の子息そんし・そゆうと申ス二人の者、官人ハ此箱崎殿に御座候由承、数の寶にかへ取て帰国ありたきとて、是迄参りたるよし申され候。へ畏て候。日本へ最前の人のおたり候か。唐へ是に候。日本へ只今の通申て候へハ、對面あらうすると仰られ候間、かうく御通候へ。唐へ心得申て候。いかに申候。官人を尋て候へハ、此所に御座あり存生のよし申され候程に、箱崎殿へ直にあはせて給れと申て候へハ、御對面あらうするとの御事にて候、かうく御通候へ。●箱崎、官人に唐の子共ひき合せ、うたひになうとや箱崎の神も納受し給ふかといふ時、●大夫江へいかに申候、一段の追手が吹候、とうくお舟にめされ候へ、船二とりのりおし出スと言時のる。

鳥追舟 廿七

ワキ、左近丞也、ひくらしの供して出、太刀持也、ひくらし、いかにたれか有。

へ御前に候。訴訟の事叶ひ本国へ下ルハ、目出度事にてハなきか。へそれハ近比目出度御事にて候、中くの御在京被成ても、おほしめすまゝになり御下向ある事、一入めてたう存る、シカく、ひくらし、いかに誰かある、へ御前に候、へ畏て候、へやれくぎやかや、見事成事哉、此よし申さう、へいかに申候、み申て候へハ、御存のことく、毎年此所にハ鳥追舟を飾て鳥を追候、いつよりも鳥追舟が見事にて候により、それを見物仕る人にて候。ひくらし、左有ハ暫逗留し、見物仕候へし。へ御尤にて候、御見物あらうするにて候。

俊寛 廿八

ワキ、平ノしやうこく入道清盛の御内の人、清盛の御娘、たかくらの后に立テ安德天王御【クハインはらみ】にて、御座の御祈祷の爲に、国々の流人赦免有、ワキ出テ太鼓

打の方へ入テ、扱なりつね・やすより入道二人出、諷ひありて、扱俊寛いつせいにて出申、色々もんだいありて、諷に、物おもふ時しも今こそかきりなりけれといふ、

諷過て、笛ふきの本になをる、笛ひしき一せい也、その一せい打出すと、あいしらいする者舟を持出、江口の舟の置所にすぐに置いて、舟をきてから笛をひしき候事もあり、二説に候。

へ一段の日なみにて候、いそき舟を出し申さうするにて候、ワキに言、へいかに申候、追手が吹来り候、急て舟にめされ候へ、ワキ心得申候、間・ワキ舟にのるうちに、へ一段の追仕合にて候、今日の様成追手ハまれに候、諷に、舟の心に叶ふ追手の風、舟こやいと、いそくらん。鬼界が嶋流人と言と。へいかに申候、御舟がつきて候、是こそ鬼界が嶋にて候、御あかり有て流人を御尋候へ。ワキ上りてから、へ先某ハお舟をつないで置申さうと言て、舞台の右によこにたをし、舟の綱を置べし、はて、から右の間、舟持テはいるへし。

△横山 廿九

ワキ、横山のいとこ也、間供して出ル、横山給酔て候程ニ、一さし舞候へし、同諷、松に千年のよハひおハ、君万歳の命有、此時横山のいとこたちて、いかにたれか有。

へ御前に候、某か帰たる由横山殿へ申候へ。へ畏て候。へ是ハいかな事、御酒宴なかばとみえて候間、中へ今ハ申されましい。へいかに申候、横山殿ハ大御酒なかはとみえ申て候間、申上べきやうも御座なく候、それハまことに有か。へ中へこの事、あら思ひよらずや某が参らうするぞ。へいそひて御出あらうするにて候。

小原御幸 三拾

へ御前に候。へ畏て候。へ皆々承候へ、小原へ御幸被成候間、皆々罷出道をも作り、そのきよめを仕り候へとの御事也、そのふん意得候へく。

関原余市 三拾一

牛若殿美濃國に付テ、さらハ心静に下らうするにて候と言時。

へか様に候者ハ、関原余一殿の御身^内に仕へ申者にて候、忝も清盛殿^ヒ、美濃国なか川のじやうを給つて、只今入部仕られ候間、皆々そのふん意得候へく。

六代 三拾二

ワキ、ほうじやう^{北條}の四郎時正、つほね呼出ス。

へ案内とハたれにてわたり候そ、いや此あたりにてハ見馴申さぬ御方にて候が、何所^ハ御出被成候ぞ。へその事にて候、寺中多ク候間、我等も誂ハ存せず候、さりながら左様に御尋ありてハ、いつ迄御尋有ても御逢候事ハあるまし、文学上人ハ此程本堂へ御參被成候間、漸々御參りあるべし、本堂へ御出ありて御逢被成候へ。へ是^ハ今すぐに御出有て、左の方へ御あかりあれハ、本堂ハかくれもなく候。

木賊 三拾三

シテ、いかにお僧達に申候、我等が栖ハたんぐわにて御入候、一夜をあかして御通候へ、ワキ、あらうれしや候、さらハ參らうするにて候、ツレ、男也共間なり共いふ、あいしらいなり。

へいかにお僧、御心安御座候へ、今の丞殿ハ少身におもひありて、時々うつ、なき風情の候、その時ハ心得て御あししらひ候へや。シカく、たれか有。へ御前に候。シテ、御盃を參らせ候へ。へ畏て候。

木曾願書 三拾四

木曾殿、一せいうたひ過テ、供、いかに里人のわたり候か。

へ里人とはいかやう成御用にて候ぞ。供、あれに新敷社^建だんのみえて候、いかやう成所にて候ぞ。へあれハ始めて八幡を勧請申て、今八幡共申ス又はにうの八幡共申候よ。供、近比御おしへ祝着申て候。御用の事あらハかさねて御尋候へ、へ意得申候。

隠岐院 三拾五

ワキ僧呼出ス

「此所の者とお尋ハ、なにの御用にて候ぞ。何と後鳥羽院の御べうを御尋候か。安キ間の事、おしへ申さうする、こなたへ御出候へ。此御へうこそ後鳥羽院の御墓にて候、又爰におもしろき事の候、女の物狂ひの候が、此御へうへ毎日参り、後鳥羽院の事を曲舞に作り諷ひ申候が、一段とおもしろく候間、暫此所に御座候て御覧あれかしと存候。御用の事候は、かさねて仰候へ。こゝろへ申候。」

羊 三拾六

高札の打所ハ太夫にとふべし。

「いかにたれか有。御前に候。畏て候、高札を打テ。皆々承候へ、けいやうこくの御門の御秘蔵のひつじ、うせ申て候間、此ひつしのありかを奏聞申者あらハ、くんかうハかうによるべし、いかやうの者なり共、望ミを御かなへあるへしとの御事也、則高札を打申て候ぞ、其分心得候へ。」

俊成忠則 卅七

ワキ、俊成也、岡部六弥太なのりて、いかに案内申候、間、俊成の内の人。

「案内とハたれにてわたり候ぞ、六弥太が参たるよし申候へ。畏て候、左有ハ暫御侍候へ、そのよし申上げうるにて候。六弥太、心得申候。いかに申上候、岡部の六弥太た、すミの参られて候、ワキ、此方へと申候。畏て候。御出のよし申て候へハ、こなたへ御通りあれとの御事にて候、かうく御通候へ。」

弱法師 卅八

ワキ、河内国高安の里に左門尉道俊と言人也、なのつてから、

ワキ、いかにたれか有。御前に候、ワキ、施行ハ今日まんにて候、念入てふれ候へ。畏て候。皆々承候へ、左衛門尉道俊殿の

施行は、今日まんさんにて候そ、急て罷出施行をうけ候へ、そのふん意得候へく。左衛門尉の子、継母にくミ出し、流波^流してわが母の事をなけき、目をなきつふし乞食する、左衛門尉、わか子ハ死たると存、子のために、てうわうしにて七日の施行をひくなり、左衛門尉、わが子とみ付て、夜に入なのり、高安へつれてかへらうすると言って、子のせりふもあり。ワキ いかになれか有。へ御前に候、是成乞食の行衛をわすれ候な。へ畏て候、かやうにも有。

護父王 三拾九

ワキ、名乗道行過テ、いそき候程にみちのく名とりの里に着て候、ワキ、呼出す。

へ此所の者とお尋ハ、如何様成御用にて候そ。ワキ、此所にて、名とりの老女と申人の候ハ、引合テ給り候へ。へ此所にて、名とりの老女と申御方ハ、かくれもなく候、則此所に三熊野を勧請申、日參申され候間、是に御待有て御逢候へ。へ御用の事候は、承らうするにて候。へ心得申候。

行家 四拾

次第・名乗・道行過て宿かる。

へ案内とハたれにてわたり候そ。へ易キ間の事、お宿をかし申さう、かうくおくの間へ御通候へ。

長兵衛 四拾一

大臣、さしこへ過テ、心苦敷住居哉^太と言時。

へやらいそかしや。へいかに申候、源三位入道頼政分の御ふみの候、文を遣テひっこむ也。

【村山】 四拾二

へいかに申候、真木次郎殿ちうしんにて候、ふみを村山に渡ス。

△二人閑 四拾三

へ御前に候。へ畏て候。へいかに菜摘の女、今日ハ何とて遅ク帰候ぞ、とう／＼帰り候へ。そのふん意得候へ／＼。

△土車 四拾四

へやあ／＼爰ハ内陣にて有ぞ、とう／＼出候へ、諷に、おぼひとりせかせ給ふ。へいや言語道断の事を申、さやうに推参をつくさハ、此国にハかなふましいぞ。

班女 四拾五

へかやうにさふらう者ハ、美濃国のかみの宿の長にて候、わらハ数多の上らうを持て候、中にも花子と申上らうハ、おさなき時よりはに持て候が、此人ハ扇にすいて明暮扇さばくりをのミ致すに仍、あふきに付て子細あるとて花子を班女と皆々仰られ候、それにつき此春都より吉田の少将殿と申御方、京へ御下り候が、わらハが所に御とまりあつて、かの花子に酌をとらさせられ、少将殿の扇、花子の扇にとりかへさせられて御下り候しに、花子其後扇になかめ入、今ハ人のおしやくとてめさるれ共終に参らす候間、長がわざにて有とて皆々わらハを御しかり被成迷惑致ス程に、色々異見を申せ共、今ハハやわらハが申事をもき、申さす候間、花子ををきてもせんなきとおもひ参らす程に、追出し申さハやとおもひさふらう。へいかに花子のわたり候か、用の事の候間、急てわらハがまへ、出られ候へや。へ此程も細々異見を申さふらへ共、御き、なく候ま、今よりしてハをき申ましく候、何方へなり共急き御出候へ、わらはが中をたがひ申すうへハ、此家の内にハかなふましい、急て御出候へ。へたれにておりやしますぞ。へ何と班女が事を御尋候か、その人ハ長と中をたがひ此内をおい出して候、今ハ何方にゐらる、も存すさふらう。へ中／＼の事

【こゝより「邯鄲」。この部分で丁が変わる。落丁と考えられる。】

にて候が、やうひさんへハ何のために御入さふらうぞ。へ扱ハさやうのために候か、わらハはいにしへせんの法を御行ひある方へお宿を参らせて候へは、邯鄲の枕と申を給りて候、是をめされてまどろミ給へハ、少の間に夢を御覧

して、こしかた行末のさとりを御ひらき候間、是をめされ、夢を御覧あれかしと存候。へあれ成大ゆか成が邯鄲の枕にてさふらうぞや。へさあらハその間に粟のぐこをこしらへ申さう。へやあくお旅人の御着候間、粟のくこを拵候へ。ぬむりのゆめハさめにけりいかにお旅人、○いそいておひるなれあわのぐこが出来て候そや。

現在熊坂 五十七

へたれにてわたり候ぞ。へいや吉次殿の御下りにて候、はやくと御下りにて候、目出度候、みなくおくの間へ御通候へ、洗足を申付候へし。

△富士山 五十八

へ是ハせんげん大菩薩に仕へ申末社の神にて候、然に此富士山と申ハ、仁王廿二代の御門、ゆうりやく天王の御宇に、一日一夜の中にゆしゆつしたりし山なれ共、霞に隠れみつくる人もなかりしに、仁王三十一代びだつ天王金光四年に、役行者のみつけ、則山をふみわけ給ひて此かた、富士山と申事始りたり、中宮より下ハこんりんざいより出来たり、中宮の上ハ天台ふり下つて御座候により、天地和合山と申て三国無双の山なるに今、唐々ほううしと申者此国にわたり、ふらうふしの薬を求め、此富士山に上りて色々の薬を求給ふ、今又しそつといふ者此国に渡り、富士山に尋入候處に、大菩薩あハれミ給ひ悉く御薬の様躰おしへ御申候、殊に当山の御薬をおくする輩ハ、諸病しつひやう共に寿命安隠に成事疑ひなし、猶も権現かくやひめの御姿を顕し給ひ、富士の薬をもろこしの勅者にあたゑ御申あるへきとの事にて候、その間待とうに御座あらうする間、某にも罷出一曲をも仕れとの御事にて候間、一かなでかなで、かへらう、常ノ末社のうたひ也。

葛城天狗 五拾九

へかやうに候者ハ、大岑葛城山をかけまはりて住このは天狗にて候、扱も天下納り目出度御代なれハ、人間もかり

そのいさかひ口論をも致さず候、我等ハさやうの事をみてこそ慰候へ。へのふ何事をいハしますぞ。へいやお主ハ何として出たぞ。へその事しや、お主を尋たれハみえぬ程に、是迄尋て来てあるぞ。へやれく嬉しや、お主に逢て力を得たよ。へ扱お主ハ何事にぞ相たか。へその事しや、かたぐ我等ハ人の喧嘩口論をみてこそなくさめ、目出度御代なれハさやうの事ハなし、徒然のあまりにちとなくさまうとおもふて天の川へ出たれハ、若キ者共が六七人寄相てよねんもなふ雑談^{サツ}してゐた程に、ちとなふりてみようずるとおもふてそばへゐたれ共、かたぐ我等ハ人間の目にみえぬに仍みつくる者もなかつた程に、さらばちとなぶらうとおもふて、その内に若キいかにも腹のあしさうな奴めが鼻をはぢひたれハ、きやつめがきをもつ^{ツマ}ふして、たれがしたぞとおもふてきろくとする所を、うしろへまハつてあたまをくハつしりとはつたれハ腹を立て、どいつめがしたぞといふて腹をたて、しんどうする所で、いや我ハ知ぬ、人ハ知ぬといふ所を、又そばな奴が鼻^ハの根のぬくる程ひいたれハ、言語道断の事をしおる、おれが耳をひきぬかうとしたといふて、取相つかミ相つく^ヒころんづする程に、おもしろうてとんづはねつしたれバ、きかくだうしの御出有て、目出度御代にさたのかぎりをしをる、いで物みせうとて打つゑを持ておもうさまなやまされて爰迄にげてきたハ。へそれハさたのかぎりをした程におしかりやつたハ道理じや。へいやお主も今迄わるい事をせぬ事ハあるまいぞ。へいやく某ハわるい事をした事ハないぞ。へかくさずといハしめ、苦しうない事しやぞ。へそれハ久しい事じやが、此葛城山の麓にちいさい子共が三人あそんでゐた程に、そのうちでうつくしい子をとりかくひたれバ、のこる式人がきもをつぶいてこそあるらう、大勢人をかたらふて太鼓・かねをた、いて此山へわけ上る程に、嬉しうてとび廻て見物したれバ、きかくだうじの御出有て、言語道断の事をしおる、ハやくかへせと仰られてした、かなやまされた程に、そのまゝ返して、其後ハわるい事をした事ハない。へされバこそお主もわるい事をした事があるハ。へそれにこりて今ハせぬ。へそれにこりぬ者ハあるまい。へいやそれも苦しうない事が有ぞ。へそれハ何事ぞ。へ只今聞たか、此山

の大天狗ハ皆々がたのうたお方じやが、岑入の山伏達の只今此山へ御つき被成たるを、ちとなぶつて御覽せられうするとして、出相給ひ詞を御かハし被成たると聞たが、我等の存るハ、仏力のある間ハ山伏達をなぶらせらるゝ事ハ成ましいとおもふてあんずるが、お主ハ何とおもふぞ。へ寔にそれハ大事をめされ出されうする、仏力神力にハ力もいるまひ程に、おちどをおとりやる事があらうとおもふ。へ我等が存るハ、かやうの時力をそへてたのうだお方に奉公をしたけれ共、大天狗ハいかやうな事があつても苦しかるまいが、我等がやう成よハ者ハ、ほうにふらるる事があらう程に、力をそゆる事ハ成まいとおもふハいかに。へ是ハいハしますことく、自然悪事がありたらハ我くがやう成者が迷惑せう程に、それハたゞおもひとましめ。へいやかやうに申内にたのふたお方の出られて、何事をしだされうも知ぬ程に、まきぞへにならうと、只とうくのいたらハよからうが、何とおもハしますぞ。へいや是ハ尤じや、いそいでのかしめ、へ左有ハ我くが心中を諷ふていのう。へいそひてうたわしめ。諷へこのは天狗の望みにハ、く、大風・土風、人々こそりてあたを^まはりあい、くんづころんづいさかひするを、見物すれハ、心もきよくおもしろけれど、飛行自在にとびまハれば、ぎかくだうじハ出相給ひ、さもあらけなくなやまされて、さもあらけなくしかられて、ひつそとしてこそうせにけれ。

玄上 六十

ワキ、大政大臣諸長卿^公、御供にて大臣も出ル。

へかやうに候者ハ、都大政大臣諸長卿^公に仕へ申者にて候、只今はへ出る事余の義にあらず、寔に申におよばざる御事なれ共、我等の頼奉りたる諸長公は、天下にかくれもなき琵琶の上手にておハします、殊更此諸長公を雨の大臣殿と申その子細ハ、ひと、せ日本の日でり夥敷て、寔に草木もかれはて、国土の人民なやめかなしむ所に、諸長公^神しぜんあんの池の端にて、雨の祈のため琵琶をひき、龍人に手向、雨をこい給へハ、龍人^神びわのひきよくにめで、雨をふ

らす事十日におよべり、それして草木めくミをうけ、ご、く成就仕る、国土のなけきをしづめ、悦ひのまゆをひらき、大臣殿のびわの威徳なりとて、則雨の大臣殿と申奉ル、惣して天下の名物三めんのびわと申ハ、仁王五十四代仁明天王の御宇に、たうしをつかハされ、けんじやう・鹿丸・青山三面の琵琶を伝えとつて帰朝せられ候折節、龍神望ミをかけ、波風あらくして日本の都へ入かたく覚えて候間、龍神に手向のため、鹿丸といふびわを海ていにしつめ申されしかバ、それより頓て浪風しづまり、なんなく都に帰朝有て、玄上と青山と此三面のびわ、代々御門の御宝なり、去程に諸長公おほしめすやうハ、わが朝におゐてびわのあふぎをたち給ふ事、我にならぶ人なきうへハ、入唐被成、弥きんのひきよくを御たちあらうするとして、はや須磨の浦に御つきにて候が、此浦は月の名所なり、暫御逗留有て月を御覧あるべきとおほしめし候哉覽、おもしろげ成塩屋に御宿をかり給へハ、老人夫婦出相御宿を参らせて、夜もすからびわを所望仕り、しんかんに聴聞あれば、折節雨降物さハかしく聞へしかバ、板屋の屋ねをあらため、とまやになし、ひようしを吟じかんるいをうかめ奉るけしきみへしかバ、大臣殿不審におほしめし、是ハ只人にてハよもあらしと、きんのひきよくをしりたる者成へしとて、琵琶を御所望被成候へハ、老人夫婦御ひわを給り、かんにたえたるばちおと爪おと、けたかくひきならず、大臣殿御きもをつぶされ、わか朝におそくわれ程の者あるましきとおもひしに、かやうにひわの上手のありけるをしらざる事こそ無念なれ、此うへハ渡唐ありてもせんしとて、入唐をおもひとまり塩屋を忍ひ出給へハ、老人夫婦立出、御袖をひかへてとゞめ奉る、大臣殿なにしに我おバさやうにとゞめ給ふ、扱御身ハいかやう成人ぞと尋給へハ、その時、今ハなにおかつ、むべき、われハ村上天王のゆうれい、老女ハなしつばの後のゆうれいなるが、大臣殿の入唐をとゞめんがため、夢中にまみえ来りたるとて、かきけすやうにうせ御申被成たる程に、大臣殿も忝キ御事なれハ、弥入唐の事御とゞまりあるべきとの事也、され共今少残多クおほしめし、先此所に御逗留あるへきとの仰にて候間、御供の人々もゆるくと御入あれとの御事也、かまいてそのふん心

得候へく。

△春日龍神猿 六十一

へかやうに候者ハ、和州春日の御山に住ましにて候、然ハ我等ましとハ申なから、当社の末社いちぶんなり、その子細ハ、当社大明神の御本地ハ尺迦如来にておハします、天竺靈鷲山におゐて衆生をさいど有へしとて、大じやうの法をとき給へ共、衆生是を知らず候間、鹿野蘭へ御下りあり、やうらくの御衣ぬぎ、そへいのさんゑをめされ、しだひの法をとき給へハ、衆生是を聞、仏法にもとづき候間、次第へに大じやうの法をとき給ふ、そのゑぎに五百のみご参り聴聞申けれハ、御法のありかたきくりきに仍、のちまし共悉ク仏果に至りとうり天に生る、その時のすぢをもつて此山に勧請せらる、扨当社の御本地尺迦如来にておハします共、此山に移り給ひてハ、慈悲まんぎやうと顕れ、衆生をさいどし給ふ、去程にとがのおめうゑ上人とて貴人のわたり候、此人ハ大明神大切におほしめし、片時もはなれ御申ある事を如何とおほしめす程の御方成が、入唐渡天あるへしとて、御いとまごいに当社へ御参詣にて候間、ひでゆきをいとゞめ御申ある、然共お上人ハ大願をおほしめしたち給ひたる御事なれハ、今更とまりかたきよし仰候間、左有ハまやぶ人の胎内へ出給ひて、さらさうりんの入めつに至る迄、悉ク仏ざいせの様躰をみかさ山へうつし拝ませ御申あるへきとて、秀行かたく申渡され候間、此上ハ上人も御とまりあるべきとの思案半成程に、我等がやう成末社にも罷出、弥めうゑ上人の御合点の参るやうに申せとの神勅を請、是迄出た、お上人ハどこもとに御座あるぞ。へいや是に御座ある、いそぎ神勅の通申上ハやと存る。へはハ当社の末社一しきましにて候、只今御前へ罷出事余の義にあらず、大明神の神勅を請是迄出候、そのゆへハお上人入唐渡天あるべきとて御いとまごいに御出の事、大明神がなしひ給ひ、秀行をいとゞめ給へ共、御思案半成程に、我等がやう成末社にも罷出、御とまりあるやうに申せとの御事にて候、菟角御とめ被成候も、お上人を大切におほしめす故なり、入唐とてんの事、仏ざいせの時ならハこ

そおほしめし立給ひても御尤にて候へ共、ハヤ今ハ春日の深山こそ靈鷲山にて候へハ、御とまり有におゐてハ三笠山に御天竺をうつしおかませ御申あるへきとの御事なり、此上ハかまひて御とまり被成候へ、其間御徒然に御座あらうする間、不調法にハ候へ共我等も古舞をまふたる事が御座候程に、ひとかなでかなで御ねふりをさませ申さうするにて候。へそれハ近比にて候、左有ハ一さし舞申さうするにて候。へめてたかりける時とかや。舞へあらくめでたやめてたやな、我等がやう成みご共も、末社と成てうたひかなで、是迄なりとて末社の神ハ、く、もとのすみに帰りける。へさらハ御いとま申候。

△鶏籠田 六拾二

ワキ、急明神へ参らハやと言て、わきざへなをる

へいかに申上候。へ御覽候へ、うつくしき鶏の御座候、あのとり取て帰り若子様の土産に仕らうするか、何と御座あらうするぞ。へ畏て候、といふて、ワキ正面の方へ向テ、とてくくくといふてだくまねをして、太鼓打の座へひっこむ、扱曲舞過テからに、いそぎいそぎにかへらハや、と言て、はしか、り、シテ柱の前通入時、へいかに申上候、御女房達のうちあこねの前、以の外に狂氣被成、御狂ひのよし申候。へ畏て候。へ大事の事じや、急きしぎさんへ参らうする、といふてかくやの方へ向テ、へいかに此内へ案内申候、へ平岡殿の仰にハ、御女房達あこねの前狂氣仕り候間、急き御出有ていのりかぢして給り候へ。へそれハ近比にて候。へ御出被成候へ。

△盛久 六十三

めしにしたかひ森久ハ、かまくらどのにまいりけりく、ト言テ太鼓打ノ処、大夫はいると、狂言出てしやへる。

へ扱も奇特成事哉、只今の守久の御事ハ中くきもをつふしたる様駄哉、かやうの事ハさらに聞も及ハぬ事にて候、只かりそめに御覽せられたる御方ハ、太刀とりのおちどにてもあらうするとおほしめされうするが、さやうにも御座

らぬ、その子細ハあれも数度の事をせられた覚えの人にてわたり候に今、守久ハ大事のめしうとにてあればとて念を入今の御方に申付られ候間、是以太刀とりのふかくにても御座ない事也、何としたる御事ぞ、我等かやう成者の分別にハあたハぬ事じや、あ、けに今おもひ出したる事の候、守久ハ清水の観世音をしんかう被成、常にあゆミをはこばれたると申が、今に至る迄毎日観音経をよませらるゝと申ス程に、只清水の観世音の御はからひにて御座あらうする、常の事にてハ有ましく候、太刀を取おとされたる斗りにてもなふて、忒つ斗りにもおれたるとみえた、かやうの事ハためしすくなき事ハある間敷候。へいかに申上候、只今の様躰は奇特成事にてハ御座なく候か、我等もかやうのふしき成事ハ今迄聞もおよハす候、只今独言に申スことく、かりそめに御覽したる御方ハ、太刀取のふかくのやうにもおほしめされうするが、大事の囚人なれば念を入させられて今の人に仰付られた程に、太刀とりのとがにても有まじきとの申事にて候、殊更とりおとされたるお太刀が忒つか三つにおれたる程に、常の事にてハ御座あるましく候、只仏神の御はからひにて御座あらうするとの事にて候が、但シ何とおほし召候ぞ。へ畏て候、扱もく目出度御事哉、命をたすけさせらるゝさへあらうするに、御前へめし出さるゝとの御事ハ、菟角守久といふお方ハ命づよい果報成御方にて候、急で参り御前へ御出あるやうに申さハやと存る。へいかに守久へ申候、ゑほしひた、れをめして御前へ急て御参りあれとの御事にて候、頓て御参候へ。

望月 六十四

ワキと同心して太刀持出、脇名乗時ハ太鼓打のきわに居ル、ワキよひ出ス。

へ御前に候。ワキ、今夜ハ此しゆくにとまらうする間、宿をかり候へ。へ畏て候。ワキ、若又名字をとう共申候なといふ。へ心得申て候。ワキ、ハしか、りの方へくつろぐ、シテ柱の本へ行。へやれくめてたい事哉、訴訟悉クかなひておほしめすまゝ、の御下りじや、急キ御宿をとり申さうするが、初宿しや程によい所をとりたいが、どれをとらうするぞ、かぶとやが大な宿しやと聞た程に、

かふと屋をとらう、ハシカ、り太鼓打の方へ向テ言、太夫ハ太鼓の方へ出ル。へいかに此内へ案内申候、シテ、たれにてわたり候そ、へたのふだ人御共申て候、一夜の宿を御かし候へ、シテ、安キ間の事御宿を参らせう、御名字ハ何と申候そ。へ信濃の国の住人望月の秋長、口ふさぐ。へや、でハおらない、シテ、如何様の御方にてても不苦候、おくの間へ御通し候へ。へ心得申候。へいかに申候、御宿をかり申て候間、かうく御通候へ。ワキ下座ニある、太刀ハワキの左の方に置也、シテ、シカく有テいかに申へき事の候。へたれにてわたり候そ、やあ、ていしゆにて候か、何の御用にて候ぞ、シテ、此やのていしゆ御礼のため酒を持テ参候、御ひらう有テ給り候へ、その時めくらと子ハ正面に太夫の右の方にあるなり。

へそれハ近比にて候、そのよし申さう、やあそれ成人達はなに者にて候ぞ、シテ、是ハ此宿のめくらござにて候、かやうに旅人の御つきの時ハ、御慰に罷出てうたひ申候。へそれハ一段の御馳走にて候、それに御待候へ、そのよし申上候へし。へいかに申上候、此やのていしゆ酒を持て参候、ワキ、こなたへと申候へ。へ畏て候、へかうく御通候へ。□シテ、此家のていしゆ酒を持参て候。△ワキ、此方へ御通候へ。へ又あれに候者ハ、此家に有めくらござにて候が、御慰のため同道申されて候、ワキ、此方へと申候へ。へこなたへ御通候へとの御事にて候ぞ、太夫とワキハ言斗り、ワキ、何成共御所望申候へ。へ畏て候。へいかに是成人、何にてもおもしろき事一ふし御うたひ候へ、子、一萬・はこわうが親のかたきをうつたる所をうたひ候へし。へいやくそれハさし合がある、よの事を御うたひ候へ、ワキ、何事を申ぞ。へ諷ひを所望申て候へハ、一万・はこわうが親のかたきをうつたる所をうたはうと申し候程に、指合が有との申事にて候、ワキ、いや苦しからぬ事、うたせ候へ。へさあらハ其方次第に御諷候へ、曲舞にうとうと言時。へあ、暫、是ハなにと、シテ、おさなき者が八つばちをうとうと申事にて候。へそれならハそれととうおしやらいで、れうじな事をおしやる程に。ワキ、左有ハ八つばちを打候へ、又ていしゆハ何もげいハなきか、△子、し、を御所望候へ、ワキ、いかにていしゆ、おさなき者の申ハし、偽の上手成由申候間、一さし御舞候へ、シテつれハ、おさなき者のすちなき事を申候、おもひもよらず候。へいやくおさなき人の申さるゝ程に、偽りにてハあるましく候、急て舞て御目にかけられ候へ。へそれハ近比にて候、左有ハ急て御拵候へ。へやれく是成

おさなき人ハ、未幼少なが諷ひもよう御うたひ候、そのうへかつこを打て御きかせなされうすると仰候、まんのふの御方しや、ていしゆの拵の間、かつこを御打候へ。

今春道成寺 六十五

ワキとつれたち出ル、太鼓打の前二居ル、あどハがくやにゐる、ワキ、なのり過テ、いかにたれか有。

へ御前に候。ワキ、今日吉日にて有間、かねをしゆらうへ上ケ候へ。へ畏て候、かくやへ入、あどハ後、間のシテハさきをにないて出様に。
かね、かたげテ出ル時、左ノかたはいる時、右ノかた

(この後の二行の注記は符箋に書かれている。本文の上側にこの付箋と内容と思われる注記があるが不鮮明で判読困難である。このためこの注記を付箋に記して貼ったと考えられる。そこで本文の上側の注記は翻字せず、付箋に書かれている注記を翻字する。)

鐘をクハンノ下に置、アド棹ヲトリ、ハシカ、りに置、二本の竹持テ出、アド、脇正面から緒ノクチの所ヲハサミサシコム、シテ、鼓の前カラ鑑ニテ取り、鐘引ニ渡ス、其間ニアドハ二本ノ竹橋掛りニ置、

へゑいやゑい、いかうおもたいなあと言て出テ鐘を上ル、うへのくハンの下におろして棹をぬき、縄をひかせて二人してか、へて上ル、鐘の高サわがむねたけ少たかく上ル、縄ひき、太夫出テ太夫のせいを鐘にくらべはからいて上ル物なり、鐘を上ルうち二人少づ、ことばをいふ、それハさだまらす。へ先鐘をしゆらうにあげた、下に有タ時ちも上ケてからなりが見事じや、あどへわごりよのいふことく下にあつた時よりあかつてから見事しや、へ鐘をしゆらうにあげたと申さう。へ急ていハしめ、あどハ太鼓打の方にひつこむ、へいかに申候、かねをしゆらうにあけ申て候、ワキ、今日鐘の供養をなさうする間、そのよし相觸候へ、又さる子細有間、供養のにわへ女人禁制と申候へ。へ畏て候。立テ。へ皆々承候へ、紀州道成寺におゐて今日鐘の供養の候間、心指の方々ハ、皆々参られ候へ、又何とおほしめし

候哉覽、供養のにわへ女人禁制と仰出され候間、そのふん相心得候へく、笛ふきの方になをる、太夫出テ、いかに此内へ案内申候にテカハシハシ候案内とはいかやう成人にてわたり候ぞ、シテ、是ハ此国のかたはらに住者にて候、鐘の供養をおませ給り候へ。へお、尤おまかせ申たうは候へ共、何とおほしめし候哉覽、女人禁制と仰出されて候間、かなひ申ましく候、シテ、是ハよの女人にハかわり候。へそのいわれハ候。シテ、此国のかたわらに住白拍子にて候、舞を舞てみせ候へし、かねのくやうをおかせて給り候へ。今春にハあはしノ事いわぬなり、ケチヘシノタメヲカマセト言也。へ仰らるれハ尤じや、左有ハ某の心得を以テおかませ申さうする間、おもしろう舞をまふて御みせ候へ、イラんやうしなと御みせ候ヘテ折節是に多ほしの候、是をかし申さうする間、是をめして御舞候へ、今春にハあはしノ事いわぬなり。太鼓打の方へ行て居ル、諷ひにひきかつてぞうせにけると言時、間のシテハ舞台、あどハはしか、りへころひて、へあ、なふく、今のハ何事であつたぞ、した、かになつたがなにてあつたぞ、きもがつぶれて正躰がない。あどへした、かななりやうであつたが、今耆人の者ハとこに居ぞと言て。へ扱々わごりよのなりハ。へいやお主ハ何としてきたぞ。へ扱もくきもつふいて氣をとりうしなふたが、わこりよがなにとしたぞとおもふてきたハ。へ扱ハわこりよもさやうであつたか、みどもハ今に氣がつかぬ。へ尤しや、扱今のなりやうハなんであらうとおもふぞ。へその事しや、かみなりであらうが、かみなりならハまへかどにちとなり共おとがせう事しやが、ふしきな。へわこりよが言ことくしや、みともハ地震であらうとおもふ。へいやくそれでもあるまい、先こちへわたしめ。一遍まわり、鐘のおちたをみて。へや、手を打テ、是であつたは。へ寔に是であつた、随分念を入てつたが、何としておちたぞ、みればりうずも其儘で有、そこねた所もないがふしきな事しや、かねをみて、した、か鐘がにへたハ、おちたふんでにやう事でハあるまいが、同みて。あどへ寔に殊外にえた、にかくしい事しや。へ扱是ハ何とした物であらうぞ。へ此ふんでハをかれまい程に、此よしを申上さしめ。へ尤しや、此ふんでハをかれまい、みともハ申事ハなるまい程に、わこりよゐて申てくれい。へいふハやすいが、みどもが申たらハわるからう、わこりよが請取て程に、わこりよがゐていわしめ。へされハこそ、みともが請取たによつてい、

にくい程に、わこりよがゐていふてくれい、ツキ出ス。へいや／＼みとものが居ていふ事ハなるまい、はやうゐていハしめ、ツキ出ス。へざりとてハたのむ程に、わこりよゐてくれい、ツキ出ス。へはいかな事、みとものがいわう子細がない、わこりよいハしめ、みどもハしらぬぞ、ツキ出シひつこむ。へやい／＼、ハや歸たよ、迷惑する共いわずハなるまい、急て申さう。へおちで御座る、ワキ、なにがおちたると申そ。へ鐘がしゆらう／＼おちて候、ワキ、鐘がしゆらう／＼おちたると申か。へ中／＼、ワキ、なにとしておちたるぞ。へ随分、念を入れて御座るが、おちて御座る、ワキ、別におもひあたる事ハないか。へそれについておもひ出して候、最前此国のかたはらに住白拍子にてある、鐘の供養をおかましてくれよと申程に、禁制のよし申て御座れハ、よの女人にハかハリ舞をまふてみせうと申て御座る程に、おかませて御座るが、もしかやうの者のわざにても御座あらうするか、ワキ、されハこそ女人禁制と申て有に、汝がくせ事にてあるそ。へあ、ワキ、去ながら立こへみようするにて候。へ急て、御らうしられい、のふ、たすかりや。へ能過テ、かねヲおろし、二人してかいテ入ル

七騎落 六拾六

ワキ出候時、前かどはしか、りの中程へ小舟を持せて、ワキ、和田小二郎と同心、シテ、後につき出ル、ワキをのせてかいをとり、ワキと同やうにたちて、ワキノ二ノ句をとる。ワキ一セイ、弓はり月の西の空行衛定めぬ舟路哉。諷へうらうつ波の音迄も、時のこゑかやおそろしや、爰にてふるふ也、ワキ、もんたいあり、腹きらんとて弓矢捨る時、あゝ是ハ、といふていたきつく、右左の手をとむるやうにひつしとむる、うしろより、△安宅のとかしとむるとハうらはらなり、口伝、左のかたきぬをぬぐなり、ワキ、舟より上ル時に「虫損」ノ矢ヲぬぐ、さて舟ヲ持テ入ル、土肥殿ハこハざれを言ふ人しやハひの。

丹後物狂 六十七

ワキ出テいかにたれか有。へ御前に候。へされハ夜前はへ御下りにて候、夜前ハ御酒氣に御座候つる間、扱申上候。へ畏て候、楽屋へ向。へいかに花松殿、大殿様の御出あれとの御事にて候、とう／＼御参候へ、ワキとシカ／＼、その事にて候、ことなる御事にハ、哥・連歌・弓・鞠・兵法・さゝら・八つばち悉ク御稽古有テ、一段と御器用に候、子をしかり楽屋へ

入ル。へ扱ももつけな事を申た物哉、何事も御覚え被成、御器用など申たらハ御ゑつさにてあらうすると存て申たれば、結句花松殿を殊外御せつかんにて候、あれ程しからせられうと存知たらハ申まい物を、ちゑのあさいま、に申て、今更くやめ共とりかへされぬ、にかゝしい事をいふた事の迷惑さハ何と致さうするぞ、惣してわざハいハ下からと申が、此やうな事で御座らう、車ハ三寸のくさびをもつて千里を走ルと申、人間ハ又三寸の舌をもつて身をはたすと申が、かやうの事にて御座あらうする、先ハにかゝしい事哉。へいやなにと申ぞ、花松殿ハはしたてにて身をなげさせられたると申か、へや、それは寔か、扱々もつけな事を申てかやうの事が出来た、扱もく花のやう成御方を笑止な事を仕た、某が口ゆへにかやうに成くたりたる程に、我等が此世にのこりてもいらさる事しや、急て橋立へ参、某も身をなけう、是非におよハぬ事じや、おもひ切て身をなけ申さう。へされハこそ一じやうしや、今迄ハよもさやうにハあるまいとおもふたが、身をなげさせられたハじやうしや、某も身をなけてくれう、身をなぐるまねをして、色々三度程して。へあ、扱も命と言物ハおいしい物哉、いか程おもひ切てなけうとしてもなけれぬ物しや。へ能々思案をするに、只此世に残たるがまししや、花松殿ハおいとしけれ共、御供ハ申されぬ程に、是非も御座ない、是合ハおもひ切て発心をして、一心不乱に念仏を申、花松殿の御菩提をとうてしんぜう、身おハなけまい、あの海のていをみれハあをみ入て身のけがよだつよ、のふおそろしやく。

同丹後物狂 六【四】十八

ワキ、次第、名のり過テ呼出ス、尋候なり。

へ在所の者とお尋ハ如何様成御用にて候ぞ。へさん候、此所は若井殿の御在所にて候へ共、去子細有て、今ハ夫婦共に此所にハ御座なく候。へ御用の事候ハ、かさねて仰候へ。へ心得申候。

付 記

西村本『問之本』の翻刻を許可いただいた、筑波大学附属図書館に心より感謝致します。また、梶山女学園大学より、平成五年度の学園研究費助成を頂きました。本稿はその成果の一部となります。なお、パソコンへのデータ入力には、日本福祉大学社会福祉学部学生の平沢真哉君の協力を得ました。記して感謝申し上げます。